

たからもの

北野小学校長 丹羽 郁人

我が家は、妻と三人の子供、五人家族である。

息子たちは、二十歳を過ぎたが、誕生日には丸いケーキを購入し、ロウソクに灯を点け、誕生日の歌をみんなで歌う。幼いころは嬉しそうにしていたが、今はどこか恥ずかしそうである。歌を歌い終えた後は、ロウソクの灯を消し、妻がケーキを五つに切る。五つに切るから、同じ大きさに切るのは難しい。誕生日の子が先ず選び、残りを子供たちがじゃんけんをする。最後に残った少し小さめのケーキを、私と妻で分け合う。

家族は、そして子供たちは、私にとって大切な、大切な、「たからもの」である。

子供たちの今年の誕生日も、ケーキを五つに切ることができた。「今年も五つに切ることができた。」その幸せを噛みしめる。その有り難さを味わってケーキをほおぼる。

「お父さんって、ホントにおいしそうにケーキを食べるね。」高校生の娘がからかう。その幸せ……。

さて、小学二年生の国語の教科書(三省堂)に、岡崎の小学校二年生の子が書いた詩が載っているのをご存じだろうか。「たからもの」という詩だ。

父さんに、

「たからものはなに。」

ってきいたら、

「家ぞくだよ。」

って言ったよ。



でも、

ぼくのたからものは、

「じぶん」だよ。

ぼくが病気になるったり、

しんじやったりしたら、

家ぞくがかなしくなるもん。

って言ったよ。

ぼく一人だけちがうけど、

お母さんは、

「ありがとう。」

って言ってだきしめてくれたよ。

お姉ちゃんに、

「たからものはなに。」

って聞いたら、

「家ぞくにきまっとるじゃん。」

って言ったよ。

それぞれの「たからもの」をそっと抱きしめる。そんな世の中でありたい。